

眞 生

第九卷 五月號

□私共の生活に於て、何が一番望ましいかと云ふならばそれは云ふまでもなく、眞の生活である。それと同時に私共の一番欲しないところの生活は偽の生活である。

□私共が人類として此の地球の上に發生し、そして、此の土に其生活を初めたことはいつ頃からであつたらうか。それはともかくとしてとにかく大へんに永い間のことであらうと思ふ。

□然にその永い人類の歴史の中にあつて、私共がかうして人間として生れて來て、その人間の一生を終ることは實にそれに比ぶれば一夜の夢にも過ぎないのであるが、靜に考ゆれば實に驚くべき一つの不思議ではなからうか。

□而もその一夜の夢を延長すれば人生の一生は五十年、六十年として眺めて見ることができるのであるが、其の人間としての一生をいかにして私共が過して來た、そしてまた、之からいかにして過して行くかを考へ來るとき更に現實の一生を私共は眞劍にならざるを得ないものがある。

□中には今漸く生れて來たばかりのものもあり、そしてまた、中には青年で働き盛りの人もある。さうかと思へば已に中年を過ぎて初老に入れる人もあり、或は已に中老を過ぎて余命幾何もない人も無いと限らぬ。

□或は獨身のもの、夫婦のもの、親たるもの、子たるもの、男たるもの、女たるもの、金のあるもの、或は無いのもの、其の他業を持てるもの、持たぬもの、思へば思ふほゞ此の世は一條のものではない。

□而も世は刻々として過ぎて行く。友よ私共の本當に生きて行く道はどの道であらうか。(念)

聽聞の意義

「可憐い子に旅をさせよ」と言ふことがある。又「可憐い子は打つて育てろ」と云ふ諺もある。自分自身を育てるのも、亦此の心掛けが必要ではないか。いつも自分の身を安逸にのみさせて置かうとするのが世の常であるが、それでは身心共にたゞ弱くなる許りである。

「道を聞くにも亦同じである。如來の大悲は偏に私共をして眞に佛陀としての生活にまで到らしむると云ふところにある。従つて道を知ると云ふことは其の道を行ふことのできるところまでに聞くのでなくてはならない。然る世の多くの人々が、たゞ道を知ると云ふことを耳でその道の話を知ることだと思ふのは間違ひも亦甚しいと云はねばならぬ。

「道を知るとは何の爲めに聞くのであるか、それは偏へに、身自らをして、眞人の生活に至らしむるが爲めではないか、少くともそれは自らの至らないところを深く反省して、自分自らをして、神の如く佛の如き眞實の生活に至らしむると云ふことが道そのものの目的である。

「然に世にはともすれば自分の人格を研ぐために聞く道を知り、只だ徒に安逸の生活に坐らうとして道を知り、人がある。乍然かくの如きは未だ眞に道を知り、人ではないのだ。(念)

目次

私の心に映じた
法然上人の宗教
土屋 觀道

念佛の種々相
土屋 觀道

議會を傍聴して
土屋 觀道

吾 便り

聖なるモノ

- 「ナゼ、あんな、佛様なんか拜がむのですか」
- 「拜がまなくともよろしい、ケレド又拜がめなくてもいけません」
- 「そりや又一体どう云ふ譯です」
- 「佛様はそんな銅像や記念碑のやうな格好して、山の上や森の中に突立つてみえるのぢやないから、そんなもの拜がめなくともよろしい、もつと大きい如來様を拜がまればいけません、總てを生かし、總ての本體となつてみえる如來様には、そんなケチな安ッポイ形なんかありやしませんよ。だから強い形を現はさうするなら、ソレ、一圓相のことを謂ふより仕方がありません。それが一番賢いやり方です、現はせぬと現すより仕方がないのです」
- 「それぢや無いのですか」
- 「無いのぢやありません、「無い」と云つて仕舞へば簡單になつて了ふが、ソレ一切に如來様のお力が來てゐるぢやありませんか、如來様の力で生きて居らぬものはないのぢや、如來様の力で動いて居らぬものはないのだから、どこにもあるのぢや、どこにも顯はれてみえるのです。だからそんな形で顯はしても、皆それが如來様を現はすことだに、又現はされるのです。だから蓮一莖でもいし、犬の仔一匹でもいし、子供の笑顔でもいし、名號の軸でも、安座の禪定佛でも、それをも労働者の姿でも、自由に拜んで而かもそれに捉はれず、生きた如來——み佛に通つて行けば、十字架上のイエスでもよろしい、それとも一本の百合の花でも十分「神」は現はされる譯です。無いのぢやない有り過ぎて、何にして顯はさうか迷ふてゐる位です」
- 「フーム、あなたは佛を一つの『勢力』とか『生命』とか云ふ意味で信じてゐるんですネ」
- 「そうです、而しその勢力を云つても動力的エネルギーとか限るものでなく、又生命を云つても生理的單なる生命でなく、價值的にそれからそれへモノを進化し、創造し、向上させてゆく價值的理法、眞實さといふやうな意味で『聖』意識だとか云はれる所以であります
- 「コリヤ、大分六つかじくなつて仕舞ましたネ、すりやその『聖』があほの像ですか」
- 「そうです、それであればこそ頭が下がるし、下げずに居れぬぢやないですか、私もその聖の中に、聖の力によつて生かされてゐる『聖なるモノ』であるからです」(梵子)



私の心に
映じた
法然上人の宗教

土屋 觀、道

一、凡夫の救済

□私の心に映じた云ふのは私の心に信せられたと云つてもよいのです。言かへれば私の心に深く信せられたと申してもよいのですが、言ふ心は法然上人の宗教の中で私の心の中に深く感銘せられたるものと云つてもよいのであります。

□此の意味に於て、私の心に深く映じて止まないものは法然上人の宗教として、其の中の主なるものは凡夫往生の教へであります。凡夫の往生とは迷想轉倒の人之を凡夫と云い、如來の淨土に生れる之を往生と云ふ、つまるところ、いかなる罪深きもの、愚か者でも悉く如來の淨土に往生ができると云ふことであります。

□此のことは深く論ずれば非常にむづかしい言葉のたどりも必要となつて來るのであります。之を一口に云へばどんな人でも等しく如來様の救いに任かつてたすかることができると云ふ教へであります。

□此のことは一見、何でもよいことのやうにも見えますが、我が國に於ては今から七百年の昔、即ち法然上人の開宗以前までは凡夫かこのまゝで救かると云ふ教へは不幸にして、未だ充分には此の世に

現はれてなかつたのであります。

□だから若しも私共が法然上人以前に生れたとか、或はまた若も此の世に法然上人が御出ましても無つたならそれこそ、私共如きものは到底如來の御救いに任かることができなかつたと思ふとき、今かうして、私共が如來の御救いに任かることのできるのはひとへにこれ上人の御力によると喜びに堪えないところでありませう。

二、救いと云ふこと

□今日に於ては神佛の救いと申せばそれが即ち宗教であるかの如く思い、また、爾來宗教と申せば凡夫の救はれるのが宗教かの如くさへ思はるゝのが常であります。乍然、從來の佛教に於ては法然上人以前まではそれが必ずしも宗教ではなかつたのであります。

□而も、それどころか神佛の救いと云ふが如きは本當の意味に於て未だ信せられないところであつて、それまでの宗教は主として、自分の力で自ら修行して、解脱を得ると云ふのが佛教の教であると思はれてゐたのであります。従つて、佛の救いによつて、私共が解脱することのできると云ふが如きことは法然上人以前の人たちは全く知らぬと申してもよかつたのであります。

□乍然、救いと云ふことは一体いかなる意味の救いであらうか、そしてまた、どう云ふわけでその救いが成立するか、たゞ「神を信せよ」「佛を信せよ」と申しても、神がいかなるものかも知らず、又佛がいかなるものかも知らないものが果してそれを信することができるであらうか。

□私はこのことについて永らく悩んだ一人であります。知らずして信すると云ふことが若も私共に許されるならばそれは大なる誤りではないか、その意味に於て、知ると信するとが一致しないところに本當の宗教はないとかう私は考へて居ります。

□尤も、知ると云つても其の知ると云ふことには色々の種類もあり、また各々の程度もありませう。乍然こゝに佛を信ずると云ふことが云はれるとき、その佛がいかなるものであるかを知らずして之を信ずることができらるであらうか、知らない佛を信ずるとは到底私共にはあり得ないのが本當ではないか。

□それと同時に「救い」と云ふことも亦同じであります。救いと云ふことが自分の力でできない要求を他の人によつて充たされた場合、私共はそれをその人によつて、助けられたと云い、又その人によつて救はれたと云ふのであります。而も此のことが私共にとつて、全く絶對絶命の場合それがその人によつて充たされた場合、私共はそれを本當の救いであると思ふのであります。

三、聖淨の二門

□一見自力の聖道は他力の淨土に比べて力強い感じもします。そしてまた、凡そ人として自分の力で自由の解脱ができるものならば、むしろ之を他人によるよりもいかにばかりその方がいさまいことか判りませぬ。乍然それがいかにも尊いものでありまして、私共の力でそれが得られないものならば私共にとつてはそれは無いのも同様であります。

□それに反して、淨土教が聖道門に比べていかにつまらないかに見えましても、それによつてしか行かれない無力の人には淨土門位い、有難くも亦尊い教へはないのであります。このことは聖淨の二門のいかなるものであるかを述べて、之を實際生活の上に比較しなくては判らないものであります。今はさう云ふ暇もありません。

□従つて、今はたゞ聖淨の二門に於て、淨土門が凡夫の宗教であり、聖道門の宗教がそれに値いせぬことを述べればたくさんであります。

□法然上人は「聖道門は智慧をみがきて悟りを聞き、淨土門は愚痴に還りて淨土に生る」と云はれてゐる。之が聖淨二門の分れ目であります。智慧を研くことは決して悪いことではありません、そして佛敎の教は所詮智慧を研いて悟りを聞くのがその理想であります。

□乍然聖道門は自分の力であくまでそれを達せやうとするのであつて、自分の力の足りないものには到底望むべくもないのであつて、なまなかのことではとても永劫に到達せられないのであります。頼つて淨土に往生をどげやうとするのであります。愚痴に還り、自力を頼まずして、如來の御力にかうとするものにはいかにそれがふがないものであります。だから自分の力で行きうると思い、自分の力で

□乍然之に反して自分の力で行くことのできないものでありませう。自分の力で行

の大悲に信賴して、彌陀の淨土に往生を遂げやうとすること位、凡そ此の世に嬉しくも亦、力強い生

活はありません。

□而も法然上人は此の二者に於て、所謂聖道の法門に行きつまつて、初めて淨土の法門に其の心眼を開かれたかたでありました。而も自らの惱みが直に一切衆生への同情の涙となりました。同情の涙を

□「我が淨土宗を開く所以は凡夫をして淨土に往生せしめんが爲めなり」と、之が法然上人の開宗の真意であつたのであります。

四、佛の大悲

□乍然私が念佛の信仰になることは並たいていのことではありませんでした。けれども私の心に佛の本願を信ずるやうになりましたのはそこに佛の大悲を信ずることができたからでした。そして、佛の

大悲を信ずることのできたのは延いてまた、私の心で信ずることができるからでした。

□その理由は、佛とは自覺と他の圓滿せるお方であるとき、またとき、佛の自覺はそのまゝが覺他の外にないものであると知つたことです。何となれば凡そ私共の願いとて、自ら之を得たとき、その之と等しきものを自分のはたにも與えると云ふことほど此の世に尊いものはないからであります。□そして、それはまた私共の自然の願いであつて、凡人類の生活として之より尊いものはないからであります。人生究竟の願ひ、即ち生死の解脱と涅槃の獲得とは、凡そ人類としての最勝の願ひであつて、その自覺と覺他とはその究竟に於て之を佛とするからであります。

□即ち自覺と他を以つて佛とする場合、己に自ら悟れるものは一体何をすべきであります。それはただあとにのこれる覺他の一行のみであります。而て、覺他の一行とは即ち一切の衆生を自らの如く自覺せしむると云ふことより外に何もありません。

□然らば佛の仕事とは即ち覺他の一行であります。即ち覺他の他には佛の仕事はないのであります。而て、それはまた、私共の本心の願ひでありまして、若も私共が悟ることがありましたならば、それこそその後の私共の生活はまた延いては以外の一切の衆生を自覺せしむるより外には私共の生活はないことになりませう。

□然に計らずも此のことが我が阿彌陀佛の御本願の上に成就せられてゐることは何と云ふ有難いことでありませう。私が如來の本願を信ずることが出来るやうになつたのも一にまたかゝる道理があつたのであります。

五、凡夫主義

□而も從來の宗教は善人でなくては助らぬ宗教、悪人の救はれない宗教でありました。ましてや解

脱の宗教、覺者の宗教として、佛敎が他に誇らうとしたときには罪深きものや愚かなるものには到底よりつくこともできないものであります。

□然に法然上人の宗教ではむしろそれらの聖人や賢人の宗教よりも、罪人や悪人の爲めの愚者の宗教であると云つてよいものとなつたのであります。此の點正しく從來の聖道門に對する一種の宗教革命でありまして、之を如來の大悲より見ますればまさしく凡夫救済の宗教となつたのであります。

□罪ふかきもの、愚かなもの、之を凡夫と云ふならば實に法然上人の宗教は凡夫救済を主義とする宗教と申してよいのであります。而して此のことは今までの聖道主義の佛敎に對して、一大革命でなくして何でありませう。

□言かへれば今までの宗教は名のみの解脱の宗教、覺者となるの教へではありましたが、實力なきもの、罪深きもの、愚か者には到底行はるべきものではありませんでしたのに、此の上人の宗教に至つて、始めて、之等の人々も等しく解脱を得、佛となるの道がなかつたと云ふべきであります。

□従つて、また法然の宗教は普通の宗教、平等の宗教と云つてもよいのであります。何となれば從來の宗教は愚者や痴者にはその救いの手が及ばなかつたのに、法然の宗教は痴者も愚者をも選ばないからであります。従つてそこには普ねく一切の人類に及ぼし等しく一切の衆生を救ふことができるからであります。(一九三〇、五、一五)

黒宮様の三昧會にて

水谷みき

○みひかりに抱かれまして十とせきは
忘れ難がる年にそありける
○うき雲を拂ひ清めてみほさけの
光りに満てる黒宮のうし

○すなごりのうつわも今は限りなき
みおやのみ手に納められけり

念佛の種々相

土屋 觀道

甲「念佛申すと心が晴れ渡るさききましたので、それから後ち随分と念佛も申しましたが、その後も一向に私の心は晴れぬのですが、之は一体どうしたのでせうか。私の念佛の申やうがまだ足りないとしても云ふのでせうか。その爲めか近頃ではこんなに念佛申してもだめではないかとさへ疑いの心が起るときさへあります。」

乙「乍然それはだれにもあることではないでせうか、そこが、所謂私共が凡夫である証據かも知れませんよ。でも、念佛申しても少しも氣分が晴れぬと云ふこともいかゞなものでせう。今少し晴々するまで念佛をぶつ通してごらんになつてはいかゞでせうか。」

甲「とても、こんなに急がしい私にはそんなに念佛ばかり申してゐる暇はありません。第一そんなに長く申してゐる根氣もなく、またさうしてゐる暇もありません。」

乙「それも御尤なことです。乍然私の經驗ではそんなに急がしいやうな時こそ、念佛でもしないと本當の仕事ができないやうに思いますがいかゞなものでせう。念佛

申す時間が長いだけ、本當の仕事のできる時間も亦長いやうに思ふことさへあるのですが、あなたにはそれがありませんか。」

甲「いや、さう云はるれば私にも確にさうした經驗もあります。だからときく、之はいかぬと自ら念佛を勵むこともあるのですが、それでも、あまりに仕事が急がしくなるさ、つい俗事とは知り乍ら、その方に心が引かれて念佛にうさしくなります。そしてまたま之ではいかぬと思ふので一生懸命念佛を申すのでありますが、さうもそれが今までのやうに有難い念佛ともならず、又今までのやうに晴々とした氣持ちにもなれないで困るのであります。」

乙「それはお互に同じことあります。必ずしもあなたばかりではないかも知れませんよ。それに今までのやうに有難く感ぜられないとか、氣分が晴々とせないと云ふやうなことでも、それは一方から見ればそれが私共の凡夫であるからでもあります。か、また一面から云へば私共の信仰が進んだ爲めに、今までのやうな喜びの程度や、生活の程度では満足ができなくなつたか

らでもありませう。尤も、自分の生活が色々な事件の爲に今までの通りでは落ちつけぬやうになつたと云ふ場合もあることもあり、又ときによると自分の不注意から知らず知らず念佛におろそかになつて、心からなる念佛が出なくなつてゐる場合もないとは限りませんがね。」

乙「すると、急がしくて念佛申す暇がないと云ふやうなことは無いものでせうか。」

甲「それもないとは限りますまい。現にさう云ふ人があることは今のあなたによつて証據立てられてゐるのであるが、急がしくて念佛申す暇のないと云ふやうなことは無い方が本當ではないかと思ふのですよ。尤もそれ、念佛の申される方の人から云ふことであつて、念佛を申さぬ方の方から云へばそれも暇がないと云ふ方が本當になりますから。然し念佛申す暇もないと云ふ申す暇もないと云ふ人が本當にあるでせうか。私には念佛申す暇がないと云ふ人にも時々くだらない事柄に時間を費してゐる人がないではないと思へる人もあります。その他念佛は行住坐臥、時と處とをきらわぬのですから、本當に念佛申す暇がないと云ふのはぎん

ものでせうかね。私自身としても同じであります。さう云ふ場合にはいつもかう云ふ風に考へるやうに申しますが。」

甲「でも本當にその暇のない人もないとは限りますまいが。」

乙「そんな人には仕事しながらで結語であると申すのであります。尤も法然上人は「念佛申し申しの仕事と思ふべし、仕事しながらの念佛と思ふべからず」と誠められて居りますが、之は仕事しながらの念佛では仕事に急がしくなるといつの間にか念佛が留守になるから念佛申す暇がないと云ふ人には或は仕事しながらでもよいと云ふのも亦止むを得ぬことでありませう。」

甲「けれども、仕事しながらの念佛ではそれこそ仕事に急がしくなる一層に念佛のことなど忘れてしまふのであります。それに仕事しながらの念佛では結局さうちつかずのものになつて仕まうのではありませんでせうか。念佛に熱中すれば仕事ができます、仕事に熱中すれば念佛ができます、結局本當のことはさういふ出来ぬと云ふことになるのではないでせうか。」

乙「私も初めにはあなたと同じやうなことを考へて居りました。乍然實際の生活は決してあなたの今御考へに

なつてゐるほごには急がしいものではないかと思ひます。そんな人でも一生のうち一口の念佛さへ申す暇がないと云ふ人はありますまい。それよりも私には此の世の中があまりにも、駄ぼらをふいたり、小人閑居して不善を爲すと云ふことの多いのを歎くものです。靜に考へれば其の實、念佛申す暇のないと云ふやうな人に限つて、反つて、本當の仕事をしてゐない人が多いのではありますまいか。

甲「さう云はるれば、全くのところそれに相違ありません。」

乙「それに、まだ念佛は單なる衣食の爲めの念佛ではありませんが、念佛を申す暇のない位では本當の衣食の生活もできぬではないかと思ふのですよ。尤も、衣食の爲めに追はれて、念佛申す暇もないと云ふ人は仕方ありませんか、それでも少しの暇もないかと考へて見ると、可なりに駄ぼらを吹いたり、くだらぬことを考へたり、つまらぬ遊びをする人は多いのですからね。だから私は少々ひにくの言やうですが、そんなに仕事に急しい人は別に仕事を止めてまで念佛せよと云ふのではない。たゞ毎日のつまらぬ考へ、くだらぬ煩悶のその暇を念佛の方に差くれとさへ云ふのです。それにそんなこと云ふ人に限つて、その實、念佛をやつかい

扱ひにしてゐる人が多いのですからね。」

甲「さう云はれると全く私のことを言はれるやうな氣がします。」

乙「まさか、あなたのこのみを云ふやうな私でもありませんがね。實際のところ、私共にも仲々念佛ばかり申してゐる暇とはありませんよ。乍然之はお互のことですが、ともすると念佛申す暇がないのではなくして、反つて念佛を怠るの心からかうした事を云つたり、またかうした氣になつたりすることが多いのですからね。」

甲「全くそれに違いありませんよ。それにまた、こんなときに限つていくら念佛申しても有難くもなれませんが、その爲めに氣分も晴々とせないので、一そのことと念佛なんか止めてしまわうかとさへ思へてならぬことがありますよ。一体こんなことでよいのでせうか。」

乙「よいと云ふわけにも行きませんが、それかと申して悪いと言はれても仕方がないではありませんか。そんな人でも人間である限り、さう朝から晩までよい心もちの時ばかりもありますまいよ。殊にお互のやうなものにとつては氣持ちのよいときばかりもないのがあたりまへではないでせうか。だから私のやうなものがあるが有難い念佛ばかりを待つた日には或は本當の念佛する

時は永久に來ないかも知れません。それで私は初めから、念佛することについては喜ぶとか喜ばぬと云ふよりも、こんな者だから如來の大悲にすがつて御念佛をせねばならぬとさへきめてゐるのであります。それに

一体念佛を有難がらうなんて考へてやるのが間違いでせう。念佛は申せば自然に有難くもなつて來るのではあるが、有難がる爲めのものではありません。念佛はたゞ往生極樂の爲めと心得て、その他の爲めに利用すべきではないと思ひます。従つて、私共はとくと此の事を豫め承知してゐないと念佛をとんでもないことに悪用しやうとさへするのであります。」

甲「念佛して有難がつてはいかぬのでせうか。」

乙「決して、さう云ふわけではありません。念佛して有難るのが何で悪いこととせう。乍然こゝに注意すべきは有難くならうとそれのみを求めて念佛申す如きはいいかと思ふのですよ。従つて、本當の念佛の申せる人には自ら有難い感じもそれに伴ふものかと思ふのです。たゞたゞ有難がらうとして稱へる念佛には得て有難くないのが常であります。それは有難いと云ふことは念佛の結果であつて、有難がらう爲めの念佛によつてそれが得られるものではないからであります。御經にも斯の光にあふものは歡喜湧躍して善心生ずと

云はれてありますから、きつと念佛するものには此の喜びがあるべきであります。」

甲「それなのに、いかに念佛しても其の喜びが起らぬのはどうしたわけとせうか。そこかに私の間違つてゐるところがあるからではないでせうか。」

乙「其の御言葉も一應御尤ではありますがあまりに向上の心強きが爲めに現在の有様で満足できないと云ふ心がそのまゝ喜ぶことのできないと言ふこともないとは限りませんでせうか。」

甲「すると、今のやうな場合私の念佛は一体ごちらの方に屬する念佛とせうか。さうもわけが判らなくなりまして。」

乙「そのことについて之は私の實驗であります。私共の喜びや悲しみと云ふものは一つの考へやうでごちらにも變つて行くことがあるのであります。一つの概念上のものに過ぎぬ場合があります。それは私共の喜びと云ふものは之で仕合である、幸福であると思はれるやうに考へれば何となく一切が有難く感ぜられて來るし、こんなことではいかぬかと、色々と現在で満足してゐられないやうに、他のものと比較してまわりますと何となく心もあせり、氣も落つかぬやうになつて來るのを覺えます。だから單に自分で有難いと思つて

ゐることでも案外につまらないことを有難がつてゐることがあつたり、また自分では之しきの事ではと満足することができないとき、反つて非常な向上の心に満たされてるやうな場合がないとは限りませんですからね。だから私共の有難いなぎと申すときの念佛も案外

議會を傍聴して

土屋 觀道

一、帝國議會

今度越後の道友原吉郎氏が議會に出られるので丁度傍聴券が戴けるので、それを幸いに議會の傍聴を試みました。時は終日の十三日でありました。朝の十時から開會であるとの事でそれ前に會場に入りましたが、愈々開會となつたのは十時半でした。而もその開會の時間は議長長の報告をして、今度の議會は本日をもって終りとし、明日午前十時閉會式を行ふと云ふことと、先日の某代議士が議長長の命令に従はなかつたから之を懲罰委員に附しますと云つて、直に暫く休憩いたしますとのことで驚くなかれ此の間僅に一分間でありました。傍聴の席はそれこそ一パイで全く身動きもできない有様でありました。入場

につまらぬときがありますよ。それと反對に自分では之ではいかぬが心であせるやうなときにこそあとで眺めて見れだ可なりに眞剣であつたなぎと思はれることがないとは限りません。(一九三〇、五、一六)

謝絶で入れないものは恐く六七百を越したことと思ひます。私も之で三度目で初めの二回は満員でだめでした。

處が再會になつたのは午後の一時三十五分でありましたが小橋前文相問題で首相彈がいの討論演説でありましたが、中途から首相の出席せないので不都合であるから首相を出せとのさわざとなり、全く議長も困り抜いて二時至つて休憩になりました。そのさわざ方と云つたら全くお話になりません、丸で子供の喧嘩よりもあさましいのです。

二時二十五分集合の鈴がなり、全三十分開會となり、首相は目下貴族院に行つて此の席へ出られないとのこととで討論はそのまゝ續けられました。然に五時二十分頃に至つて、貴族院の方は已に二時半に終つたのに首相はさ

うした、首相を出せと云なるものがありました。それが再び議場は混亂して全く議事がとれないので、議長再び休憩を宣しました。

それから待つこと更に三時間許り、夜には入つて八時二十分三度開會となりましたが、首相が顔を出さないのので首相を出せ、首相を出せで再び議場は混亂に陥りました、三度議長は休憩を宣しました。

それから待つこと更に二時間を過ぎ夜も十一時頃になりましたも未だ開會となりませんので、私はそれで見切りをつけて會場を引き揚げました。聞くところによれば十一時半頃に至つて、已に會期も切迫し議事の時間もないからと云ふのでそのまゝ開散となつたと云ふことと此の間僅に二三分、原氏の御歸りは十二時半でありました。

以上私の知つたのは議會最後の一日でした。乍然この一日の中果して本當に議事の進行を見たのは幾時間でありましたか、朝の十時から夜の十一時半まで合計十三時間半に於て議場に其の會を開けたのは實に正味三時間と三四十分を出でません。而てその休憩時間實に十時間の上を越して居ります。而もその間會議なるものが果してされだけの眞剣さでその議事が進められたか恐く之を傍聴した人の一人でも認むるものはないかと思ひます。

結局はつまらない議會だなあ、こんなことで果して帝國の前途が治まるであらうか、之では全く帝國の前途は到底立ち行くものでないと思はれました。一人として眞剣に國を思い社會を思ふ本當の人がないではないか、全く黨派と黨派との争いに過ぎない、所謂争いの爲めの争いに過ぎない、之では國は亡びるの外はないと思はざるを得ないのでした。

二、政治と宗教

それにつけても思い出さるゝは政治と宗教との關係であります。信念なき政治家の態度、そこには眞に國を思い民を思ふ何等の眞實がないのであります。黨派あつて國あるを忘れ、己れあつて民あるを知らない、我利々々の集合に外ならぬのが所謂信仰なき政治家の常であります。

だから、そこには確固たる帝國の前途も見きわ目がつかず、又それに對する社會的政策も方針も無いのが所謂政治家の常であります。従つてそこには所謂心からなる民衆への同情がない、國を思い民を思ふ眞實の叫びがない。之では國の前途よりも今現に私共の生活が立ち行かぬと思はれました。

政治困難だの、思想困難だの、經濟困難だのと、それ

らの決議に對して誰一人反對した人はありませんでした。乍然そんなことを議會で決議しただけで何になりませう。決議しただけではその國の前途は何等の變化もないのであります。

三、政治と生活

こゝに於て、政治は即ち生活でなくてはなりません。單なる議政壇上の叫びのみが決して議會の能でないことは云ふまでもないことであります。政治の要諦は要するに民の心を安するにありませう。乍然さうしたなら民の心が安まるが問題です。そこに政治の要諦は更に一步を進めて之が實現への方策にまで現はねばならぬであります。そこに政治が所謂生活と云はれる所以であります。

吾朋便り

□大垣市 桑原省三様より
南無阿彌陀佛、御懐かしき行基寺三昧會も愈昨日御開き相成嗚々賑々敷御一同御精進の事ご御羨敷成候私共参加させて

頂き度は山々なれ共明日東京の孫共兩名休暇にて歸省いたし夫々又來月二日(日曜)佛教座談會に於て釋尊降誕會を執行する事となり居り種々準備に忙殺せられ誠に乍残念本年は御縁無候不悪思召被下度乍檀山田上人へも可然御傳聲被下成度候合掌

然に此の点について、今までの多くの民衆は政治を政治家の政治と心得て未だそれが自分の政治であり生活であることを痛切に感ずる人はいないことは實に甚しい遺憾であります。議會に昇れる國會の議員たちは即ち私共の代表である。而に彼等の大部分は殆んそそのことを忘れて、單なる自らの議會の如き感がある、之先づ第一に彼等に深き反省を促さねばならぬ事柄であります。そしてまた、之を見る私共の議場であり政治であることを知らねばなりません。

此の意味に於て私共は更に一層の政治と生活の關係を明にして、民衆の力を以つて、之等の代議士の品質を良くせねばならないことを痛感しました。(一九三〇、五一八)

□新潟縣 岩下祥兒様より

南無阿彌陀佛、私事不性の爲めいつも御無沙汰仕りまして申譯がありません。過日御光來の際は大変失禮仕りました。私共も御陰様で慈光裡に過させて頂きました。兒玉先生も頗る元氣であります。私來る六日頃から鶴岡、酒田、會津、若

松、東山温泉方泉方面に旅行致しますので遂に上京致し兼ねました。黒宮様のお別時にもお伺ひ致し度いのですけれども鶴岡方面行は是非ならぬ用件があるので残念ながら失禮させて頂きます。

末筆恐縮ですが黒宮御一家様始め道友の皆様によりしく願ひます。合掌

□大阪 藤村章様より

南無阿彌陀佛、御無音に打過ぎ申譯も御座いません。

御上人様御奥様御嬢様方御坊様御けしき塵しうくらされませ御事ご御悦び申上ます。先日よりいつこでも俗事にかまけ御尊顔に接する事出来かれまして深く御なつかしう存じます。去月二十九日圓平寺様より黒宮様の御別時で御上人様も御見え遊ばしますこの御誘ひ頂き何さかして隨喜させて頂きたく存じて居りますが何分孫をあづかつて居りますので都合出来ませず残念ながら思ひ止まりましたような事で、いつぞやの眞生で死んだつもりで仰つて奥様を電報でお呼になりましたお話しを伺ひましたが私共は他の事なれば留守くらひたれにでも致させ

ます。藤村もよろこんで進めてくれますので御座います。孫を見てください者が御座いませんで御盛會を想像いたしながら唯一人御別時氣分で御念佛に精進させて頂きます。合掌

□某女様より

南無阿彌陀佛、黒宮様に御越しの事ご承りながら心おち居ぬ思ひ致し乍ら家事にさえられて五日迄は得参らで後より七日迄在りし事を承りいさゝか残念にいたしました。しかし、先日あの苦しき手紙を差し上げ申してよりさふも救はれがたき思ひになやまされて本當に堪えやらの思ひにて和語燈籠をさり出しいづこもなぐ拜見して居りました處「浄土ヲ願へ共猛カラズ念佛スレ共心ノエルナル事ヲ歎クハ往生ノ志ノナキニハ在ラズ志ノナキモノハ、エルクナルヲモ歎カズ、猛カラヌヲモ歎シマズイソカ道ニハ足ノオンキヲ歎ク急ガマ道ニハ是ヲ歎カザルガ如シ好メバ自ラ心スルト申ス事モアレバ漸々に増進シテ必ズ往生スベシ(中略)——況ヤ往生ヲ願ヒ念佛申シテ我心ノ猛カラヌヲ歎カンラバ佛モ哀ミ菩薩モ守リテ障

リヲ除キ知識ニ遇フテ往生ヲ得ベキ也」さあるを拜見いたしひじと胸打たれ先日の御上人の御話と思ひ合せてしみじみ限りなき如來のおじひを感じさせて頂きました。其前後から毎夜八時から二三の婦人と共に御堂にて御念佛をつゞけさせて頂いては居りました。御念佛精進のけいじの時は何さなう目に見へぬ力に引かれてぐんぐん明い道を歩まして頂きませう。それを知り乍ら先日の様なくもにおそばれは誰に話す事もならずひっそり苦むので御座います。いよゝゝ御念佛御さいそくか空恐ろしく存じますさふじいつ迄もこのうなでございませう。いぐ度かたをいぐ度か起されてゆかればならぬこと、くやくしてなりませぬ、淺ましい業のふかき、ほろゝ御上人にも相そがおつきになる事切なく拜します御許し下さいませ。折りふしおほがきでなりとも御示導下さいませ。生命の力にして参ります。合掌

御念佛で事の足るのを業ふかきためいつか曇つてゆき勝ちでございませう。

【愈々春も過ぎて夏も来さうになりまして、皆様には御變りもありませんか御安康のほどを御祈り申します。次に私共一同にも近頃は此の上もない壯健の中にありますから御安神下さい。

【次に本月は越後の原様が議會の爲めに上京せられまして、私の學寮に御宿り願いましたので議會のことも手にさるやうに判りました。殊に最後の日は幸い私も傍聴ができて近頃には喜びでして、乍然それについても痛切に感じたいことは信念のない代議士ほど仕やうのないものはないと感じました。國民の議會が今少しく民衆全体の生活を中心として決議せられればならぬことを痛感します。

【次に五月の一日から七日間の三昧會が黒宮様でつしまりましたので私もあとの五日間を御隨喜させて頂きました。入信記念の十周年だと云ふことですが、十年前一日の如き黒宮様御努力には感心する外はありません。集る人も人数は少なかつたのですが心からなる道友の集りま

して此の上もない喜びでした。

【次に本月の眞生は今少し早く發行すべきのころ、色々の事件で思ふやうに筆がされないで、さうく失禮いたしました。今后とも注意は充分にするつもりですがその點深く御許しのほどを御願ひ申します。

【尙ほ、一つの悲しむべきことを御一報せざるを得ないのですが永い間の私共の道友であつた三重縣の大矢知友工門様が昨年十二月に御他界になつたとの報らせが本日その奥様からありました。茲に謹んで御一報いたします。

【又一方には之も悲しい御報らせですが大阪の眞松院の松本壽延尼様が本月の十五日に御他界になりました。氏は永い間の御病氣でもあり、非常におつらいことであつたらうさかれが御同情は申して居りましたが、愈々かうして御かくれになつたから思へば限りない愛惜に堪えません。いつかは私共もさうなることかと思ひ到るとき等の道友がそのまゝ、私共の一大善智識となつて頂くのを覺えます。南無阿彌陀佛。(五月十八日)

◎眞生發刊に就て

土屋 親道

【本月の眞生は豫定に遅れてすみませんでした。實は先月未だに幾つかの原稿はできてあつたのでありますが、色々の用の爲めに其の整理が遅れまして、愈々印刷の方へ廻はさうと云ふさきになつて、原稿をまきめか、りますと何もなく新稿にしたい気分となつてさうく今日にまでなつたのであります。

【此の事は讀者の方から云へば期日までそれが發行せられないことは非常に氣持を悪くすることであり、折角讀まうとして待つてゐた氣を腐さらかすことでもありますから私の方としてもその點は充分に注意しては居りますが、それについても時とするさうして原稿が遅れてさうすることもないことがあります。

【之は私の修養の足りないから來ることはさよりでありませんが、それにしても無理にしてまで筆をさることは所謂書か人が爲めに書くことになつて私の氣分が

さうも乘氣がしないので困るのであります。

【かき云つて、何さかして間に合せるやうと思つて筆をさりましても、時によるさ全く筆がされぬので仕やうがありません。時による朝も早くから夜も遅くまで色々机の前に座つたまま、筆をさることもありますが一つも氣のりのせぬさきはそれでもさうすることでもできません。

【それは恰も出産の時に陣痛を待ちないで産うとする母親のりきみの如く全く力抜けしてその筆が進まぬをさうすることでもできません。

【かき云つてそれでは全く書くものがなにかさ云ふに決してさうばかりではないのであります。そこには可なり書きたいもの、云いたたいものも可なりに多いことでありすが、あまりにそれが多いので一つにまとめることが困難な感じであります。それは已に書くべき何ものかは十充に宿つてゐるのでありますが、また出産に對する陣痛の來ないのをさうすることでも出來ぬと云つた具合であります。

【獨り子のやうに可愛い此の「眞生」に對して私は可なり力を注ぎたいと思つてゐます。だから少々發刊の日は遅れても成可くよいものを書き度いと思つてから少々その日が遅れても道友のよしみとして此の失禮を許して下さい。

【そしてまた、信仰上の問題やその他のことで皆様御感想や御質疑等が此の誌上に載せさせて頂くならば之また何よりの事と存じます。さうぞ御遠慮なく道友の御近況でも御知らせのほどを御願ひ申します。

み き を

さことは導給へ師のうしよ
ちまたに迷ふおるかなる身を

道につけ道を照せの仰世言

承りては袖をわらしぬ

ひんがしの都にけふは歸ります

お引とめせんすべもなくして

世の多くの人々は、自分によいと思はれるもの、みを賞めて、自分に都合が悪いと思はれるものをそしめるのが常だ。乍然それが果して正しいかさうかはさう云ふ自分が先づ反省して見るべきでないか。人のうわさも時とするさかうした誤りから出て來る時がある。

眞に生きるさ云ふことはその實、此の身を眞實の大道に献ぐることである。献ぐるさは死ぬることだ。即ち道の爲めに此の身命を捨てることだ。そこに生死が一如となる。昔の諺に「ふぐは食いたし命は惜しむ」さ云ふことがあるが、命の惜しい位で本當の道に生きるさことができるであらうか。



◎特報

大矢知友 工門様
杉本壽延 尼様
昨年十二月御他界
本月十五日御他界
右訃報一讀んで道友に御知らせいたします

誌代拂込並寄贈者御芳名

- 壹圓宛
 - 柏崎柴野甚次郎様 高橋きゆみ様
 - 黒丸 友次様 近藤 松榮様
 - 矢代 成一様 大島喜代治様
 - 三重藤村長四郎様 宇佐美正信様
 - 市川 秀一様 島根佐々木鶴代様
 - 山口角部百太郎様 岐阜坂野 貴美様
 - 壹圓五拾錢
 - 三重日比 崇徳様
 - 貳圓宛
 - 柏崎岩下 祥兒様
 - 岐阜長谷川嘉兵衛様 久富 信一様
- 静岡藤井 さし様 大島 瑞龍様
- 大阪清水恒三郎様
- 參圓
 - 愛知内田忠平様
- 五圓
 - 三重大矢知ひな様
- 貳拾圓
 - 焼津眞生會 天野源一様 扱
- 壹圓
 - 大垣吉田ふじえ様 大垣 日比東様
 - 名古屋益川齒科醫様

(大正十四年八月十三日) 昭和五年五月廿三日印刷納本 (毎月一回十二日發行) 第九卷第五號
(第三種郵便物認可) 昭和五年五月二十五日發行

價定誌本	註文の注意
一部 金十錢 郵税共 半年 金六十錢 全 一ヶ年 金一圓 全	昭和五年五月二十三日印刷納本 昭和五年五月二十五日發行 一 東京市芝區芝公園十四號地九番 發行兼 編輯人 土屋 觀道 名古屋市西區隅田町二一番地 印刷人 百々治之助 名古屋市中區錦屋町二丁目 印刷所 龍山田活版印刷所 電話東(4)〇八五・五五五 東京市芝區芝公園十四號地九番 發行所 眞生社 振替口座東京四七二八八番
購讀希望者は代金を添へて御申込下さい 誌代は總て前金御拂込の事 送金は振替によるのが便利 です	